

## 「潰れる大学、潰れない大学」(抜粋)

中公新書 pp28～32

### 第二章 学力低下

「人生の一大休憩所」「就職への通過駅」「カルチャーセンター」「レジャーランド」「義務教育」「不本意入学」「教育依存症候群」「燃え尽き症候群」「一に遊び・二にバイト・三にサークル・四、五がなくて六に楽勝コース(科目)」「前列聞く人・中列寝る人・後列騒ぐ人」「居眠り+二つのシゴ(私語と死語)」「知の空洞化」「惰性で大学院」「講義崩壊」「授業は三T(退屈・つまらない・手持ち無沙汰)」

「アルバイト必修・授業選択」「幼稚な高校四年生」「小学十三年生」「大学の専修学校化」「進路不明症候群」「喫茶店代わりの女子学生」「新三たい(規範感覚ない・人間関係ない・達成意識ない)主義」「学生失脚」「だらしな系風俗(金パツ・ケータイ・ジベタリアン)」「薄皮饅頭(餡=改革の"案"ばかり)」「人生十八歳確定説」

松山大学法学部の田村譲教授がホームページで紹介している「現代の大学のキーワード」の数々である。やや自嘲気味、揶揄的なものもあるが、当たらずといえども遠からず、という印象はある。学力の低下を表す言葉が目立つのが特徴だ。

読売新聞が全国の四年制六百七十七大学の学長らに対して行った大学改革アンケートでは、回答した四百七十九大学の五二%が学力低下を「大学運営上の深刻な問題」に挙げた(一部参照)。国公立別では、私立の六四%、国立の三六%、公立の一七%だった。低下の具合は「かなり低下」が一五%、「やや低下」が六七%で、「低下していると思わない」は一五%に過ぎなかった。低下の内容では、課題解決への意欲欠如、論理的思考力の低下、日本語能力の低下の三つが上位を占めていた。基礎学力を軽視し、考える力を養ってこなかった初等中等教育のつげが回った結果、学力が低下していると答えた大学の八二%では授業に支障が出ていた。

学力低下は深刻化し、なんとかしなくてはならない事態である。

#### 「学びを学ぶ」

前述のアンケートでは「かなり低下」が、私立に目立つが、「やや低下」と千葉大や大阪大なども答えている。

湯川秀樹(物理学賞)、朝永振一郎(同)、福井謙一(化学賞)、利根川進(生理学・医学賞)、野依良治(化学賞)の五人のそうそうたるノーベル賞学者を生んできた京都大も例外ではない。

学力調査をしたら京都大の文系の学生は、小学校で習った分数の引き算が一割以上が解けないのではないかと、などという説もある。しかし、京大全体の学力低下を示す決定的なデータはない。教官らは日々の講義で、あるいは入試を採点して学力低下を現実のものとして肌で感じ始めている。

授業改革に取り組むために設けた京都大高等教育教授システム開発センターが、一九九九年三月、教官へのアンケート結果をまとめた。それは学内に一種の衝撃をもって受け止められた。学生の学力が低下傾向にあると考える教官は、回答者の四八・二%に達していた。四年前の調査と比べて、十ポイント近く増えていたのだ。

危機感を感じた大学側は、二〇〇二年四月に「大学における学びの探求」という新しい科目を

設置した。いわば「学びを学ぶ」という前例のない科目だ。

そのシラバス(講義概要)は、刺激的であり、挑発的で、「授業のテーマと目的」にこう書いている。

「近年、授業に身体だけ運んで講義を受ける、いわゆる『お勉強』に長けるだけの学生が増えているといわれますが、それでいいのでしょうか。大学で『学ぶ』ということは、自らの興味・関心を見つけそれを自らの意思で探求し深めていくものではないでしょうか。…皆さんは、学問に関する知識や情報を伝達され、ロボットのように頭に詰め込んでいくだけの存在ではないはずで、自分から何をやりたいか、何を学びたいかを主体的に見つけ、自ら知識や情報の価値を判断し学んでいく存在のはずです」

この講義開設に先立ち、「自己理解教育プロジェクト2001」として、センターの溝上慎一講師が中心となり、大阪大、千葉大、同志社大などの五大学の研究者が協力、「大学生の心理学」という実験的な講義を行った。「より発展した見方や人格の形成、より良い大学生活を過ごすための機会を提供する」が目的だった。講義を受けるには、自分の生き方や学業、社会のことなどを、より広く深く考えてみたいという積極的な姿勢を持っていることなどの条件を付けたが、五十人の定員に対して約二百人の学生が応募するという人気ぶりだった。最終的には三十五人の学生が六人程度のグループになり、自分にとって学ぶ意味は何かについて討論を繰り返した。学生は一年生が中心で、四年生も希望して加わった。

十二回の講義の後、三十五人がA4判二枚にまとめたリポートを持ち寄り、相互評価をした。それぞれの大学生観から三十五通りの京大生の今が浮かんできた。「明確な将来像を得ることができずに、それを求めている自分がいることに気づいた」「今、自分はまさに自分のための価値観を模索しているところだ」、「大学生活を満足するためには、不満をたれる前にこっちが自由を利用するしかない」などである。

その中で、溝上さんの目に留まったのは文系一年女子の「University Blue(大学生の憂鬱)を乗り越えよう」というリポートだった。

「自己の成長は期間限定ではないことを頭の片隅に置くことが、もんもんとした University Blue を乗り越え、「今」をおおらかに生きる第一歩であると思う。……大学生活の最も希少で価値ある点は、他者を競争する相手ではなく、共存する相手とみなせる時間であるということではないかと思う」などとあった。

「京都大でも、学ぶ意味が分からず、入り口で苦しんでいる学生は多いし、不応や無気力という言葉では言い尽くせない、何か特有の雰囲気もある。そのもやもやした感じに、あまりにもぴったりはまる言葉だった」

というのが、溝上さんの述懐だ。

こうした学生の心の揺れにつながるものかどうかは分からないが、入試の答案に学力の変化が顕著に表れていると、上野健爾・理学部教授は指摘する。数学の採点では大教室に教官約七十人が集まり、一人が何百枚もの答案用紙を採点していく。

試験問題は五、六問の記述式だ。どの答案もすべての問題を解きかけながら、結論にたどりついていない。二十年ほど前の答案は千差万別で、出題者の想定した解き方とは違った方法で正解を出し、採点者はこんな解き方もあったのか、といううれしい驚きを感じることもあった。受験生の柔軟な頭に脱帽した。それが次第に答案がパターン化してきた。今では最後まで解いたものすら見られない。部分点を足し、得点化するのが当たり前になった。

「本当にできないなあ」。採点後、大教室では嘆きかばやきか分からない言葉がかわされるといふ。

上野教授は授業でもさびしい思いをすることがある、と話す。問題を黒板に書かないで、口頭で説明したことがある。「ここは大事、試験に出すから」と繰り返し、学期末試験で予告通りに出題したのに、九割以上の学生ができなかった。

上野教授は話す。

「抽象的にものを考えたり、自分で勉強したりする力がついていない。自分で能動的に考えて分かるという経験がないので、課題を出しても反応がない。ヒントを与えると出来るが、次のステッ

プにはまたこちらがヒントを与えないといけない。その繰り返しになっている」  
こうも言う。

「分数が出来ない、などというのは分かりやすいが、テストで出来るので学力があるというのではない。文脈をとらえずに手続きだけを覚えている学生が大学に入ってきている。入学したときは意欲を持っているのに、途中で分からないことが出たとき、すぐに挫折してしまうようだ。世界に通用する研究者を養成してきたのに、今の学生を見ていると、だれも分からない難問に取り組むなんて無理ではないか」

数年前、学期末試験の後で、合格の張り出しが少し遅れたことがあった。「試験を受けたのに成績がついていない」と二十人ほどの学生がやってきた。一人ずつ面接して「試験は出来たか」と聞くと、「五問中、三問書きました」と答えた。「書きました」ではなく「出来たか」と聞き返すと「さあ」と言う。自分で問題が解けたかどうか判定できなくなっていたのだ。上野教授の悩みは深い。

工学部には次のようなアンケートがある。地球工学科三年生百八十人のうち、科目の内容が分からなくなつてつまづいた時期(複数回答)は、一年五〇%、二年三八%、三年二五%で、「ない」はわずか五%だった。つまづいた科目(同)は、数学五五%、物理四四%、化学一六%となっていた。

工学部らしくない結果は教官を驚かせた。アンケートを担当した荒木光彦教授は「学生に顕著なのは論理的思考が出来なくなっていることと、自分で調べて勉強しなくなっていること。昔の学生はラジオが好き、人工知能を作りたいと、ある程度イメージを持っていたが、今は漠然と技術職にという感じ。京大工学部なら就職先も良いし、というような決め方だ。入学の動機が違う。勉強せずに入ってくるわけではないのに……。受験で何を不得、何を失ってしまったのか」と語る。

工学部ではアドバイザー制度があり、教員一人が四、五人の学生を担当、履修登録の相談や、その後の進路や科目の指導をしている。最近では学生は履修相談の時だけ来て、成績が悪くて呼び出しても来ず、研究のアドバイスではなく「ちゃんと勉強しているか」という指導になっているという。「University Blue」が別の形で表れている。

工学部が二〇〇一年度から始めた教育改革では、学生が研究室を訪ねる講義、技術英語や工学倫理といった講義を実施し、学生の関心を引きつける方法を模索している。

教養部を再編して設けられた総合人間学部でも同じような悩みを抱えている。この学部は文系、理系の垣根を低くしているのが特徴で、主専攻と副専攻を持つことが出来る。例えばドイツ語と情報学の両方を専門的に学ぶことも可能だ。が、選択の幅が広いための悩みもある。

京都大は「自由の学風」を誇ってきた。大学は学生をすべて放っておくのが原則だった。しかし、キャンパスに広がる学生の憂鬱に対して、学生を放任できなくなった。教官三人が不登校となった四年生の男子学生の下宿を訪れ、気持ちを聞いた。両親とも連絡を取っていないという。学生は何をやりたいのかわからない、教授や他の学生の前で自分の意見を発表しなければいけない少人数のゼミは苦手だ、と打ち明けた。

宮本盛太郎・総合人間学部長は「高校まで予備校や両親に指導され、急に好きなことをやれと言われても迷ってしまうようだ」と言う。

教官側の学力低下への嘆きと悩みに対して、当然、学生側にも反論がある。「ノーベル賞を取るために入学したわけではない」(工学部二年男子)、「学力低下と言われても、何と比べられているのか。先生によってはノートを棒読みする人もいて、授業がつまらないから意欲がわかないことだってある」(経済学部三年女子)。大学改革を進めるには、学生の側の意見も真摯に受け止めることも大切だ。

## 退学勧告

いっこうに改まらない無気力、無目標で、学力向上への努力をしない学生に対して、山梨大は「雷おやじ」になった。

二〇〇一年度の前期試験が終わった十月下旬、単位が大幅に足りず、成績の悪い学生を次々と保護者とともに工学部教官室に呼び出し、「このままだと、半年後には退学です」と、宣告し

た。その数、約百十人。一～四年生の約5%にあたった。「レジャーランド」にひたひたきり、自分を見失った学生が勧告を受けているようだ。

国立大で初めて採り入れた退学勧告制度だった。卒業に必要な単位は百三十単位で、二年の前期終了時に三十単位、二年後期に四十単位、三年後期に五十五単位、四年後期に七十単位を取得していなければ、勧告の対象になる。新たに退学の基準を厳しくしたわけではなく、過去の統計からみて、現状のままでは卒業できる可能性は極めて低く、改善の見込みがないと、この制度のために設けた専門委員会が判断した結果である。対象になる学生を放置せず、学習指導をしながら勧告する。学期ごとに二回連続して勧告を受けると、退学が待っている。

日本の大学は入学さえすれば、学生が大学をレジャーランドとして見ようが、アルバイトのおまけとしようが、留年はあっても卒業は難しくないと言われてきた。古典的な日本の大学批判の一つだ。その"定説"からの一大転換である。大学がこの制度の導入を明らかにした時、「そこまでやるのか」という驚きの声広がった。それは、"定説"がいかに社会の常識となっているかを示した。

「学ぼうとしない学生はいらない」これが大学は教育・研究の場である、という根源的な意味付けに対する当たり前の大学側の宣言だ。普通に勉強すればクリアできるレベルなのに、それさえ怠っている粗悪品は国立大として社会に出せたい、という思いがある。大学教育への企業、社会の不信と期待。社会が変革の大波をかぶっているのに、改まらない大学へのいら立ちもあるだろう。

伊藤洋・工学部長がそれらの背景を説明する。

「これまで、このような問題があることがわかっていたが、手をつけてこなかった。社会が右肩上がりのときは、それでも何とかなっていた。企業も白無垢の学生を採用し、社員教育で色を付け、一人前にした。その結果、日本流の画一的な社員教育によって"社畜人間"が作られたが、企業のグローバル化で、それらは色あせ、通用しなくなった。経済の世界では『新古典主義経済理論』が広まり、今やグローバルスタンダードは僚原の火のようにここかしこに火の手を上げて燃え盛り、焼き尽くさんとしているというのに、この国の政治も経済も教育もなんとも脳天気なことをやっているのではないか。大学は根本から問い直されているのに、まったく変わっていない状態だ。国立大は国民の負託に応える必要がある」さらに、こうも話す。

「社会が『雷おやじ』でなくなっている。大学がやらないといけない。学生の大敵となるべき教官が問題のある学生の存在に気づかず、学生がシラオオのように透明になっている」。言葉は教官にも学生にも辛らつである。

勧告を受けた三分の一の学生が自主退学したが、やり直しの機会はある。一年以上、社会経験をして学ぶ目的を見つければ、再入学できる。教授会が最終決定するものの、再入学した場合、以前に取得した単位は有効だ。

「入学していきなり退学勧告を導入すると言われて驚いた。大学生生活をエンジョイしたかったが、プレッシャーを感じる」(機械システム工学科一年男子)、「授業が厳しくて遊ぶところではない。自分なりに頑張れば勧告はないと思うけれど」(物質・生命工学科一年女子)。

「けじめ」を求められた学生の声だ。一罰百戒の意味も込められている勧告を、勉強している学生は歓迎している。まじめな学生は授業中にいびきを聞かなくてすみ、うつらうつらしていた学生は目がさめた。大学のショック療法は効果を上げているようだ。

一方的に学生に厳しさを押し付けたわけではない。大学側も変わろうと努力している。学生の逃げ道となるような出席すれば単位がとれる「楽勝科目」を見直し、学長名で警告したり、授業を他の教官、学生によって評価したりする。大学院への進学を前提にしたカリキュラムの再編などである。

ここまで踏み切った原因の一つの学力低下は、大学入試センター試験の前身、共通一次試験が始まった一九七九年ごろから感じるようになり、「ゆとり教育」が加速させたと見る。

普段の生活でも知らないといけない基本知識の電池の電圧や東西地域の電流の周波数の違いなど、教科書に書くほどでもない知識がない工学部学生がいるという。基礎知識は高度な知識を教える土台だが、ある世代から空洞になり、その空洞はしだいに大きくなっている。

伊藤学部長は、つい「昔は……」と話していく。

教官と学生、学生同士の横のつながりが乏しい。微妙な感情のやり取りがいない携帯電話の世界と同じだ。よく出来た『トロッコ』のように脱線せずに大学へ来ている」嘆いているばかりではない。「就職より『創職』しろ」。学生にはこうメッセージを発している。山梨大の卒業生は企業役員の数で全国のベストテンに入っている。それを売りものにする「企業家経営学特論」を二〇〇二年度に大学院に開講し、社長学を学生に伝授する。厳しい現状からの展望を開く挑戦が続いている。